

社会 その1 (4枚のうち)

24	受験番号
中	

学校で勉強する立場のためまだ社会に出ていない人たちにとって、働くということはあまり身近なことではないかも知れません。日本国憲法では、働くことについて（憲法では「勤労」と呼んでいます）「すべて国民は、勤労の権利を有し、義務を負う」と定めています。では、人はなぜ働くのでしょうか。「生きがいを求めて」などの答えもあるでしょうが、たいていは「生活のために」という答えが返ってくるのではないのでしょうか。じっさい、ごく限られた裕福な人をのぞいて、世の中の人びとにとっては自分や家族の生活を成り立たせるために、働くことが必要です。今日は、働くこと（ここからは、「労働」という表現も使います）にまつわるさまざまな問題について考えてみましょう。

〈近代以前の生業と労働〉

自然界から食料を獲得するために行われた動物の捕獲や植物の採取は、労働の最初のあり方でもありました。その後、農業が行われるようになると、より多くの人びとが協力しあって働くことが一般的になりました。経済の発達とともに、農業だけでなく、さまざまな製品を作る手工業や、作物・製品を取り引きする商業も発達し、それらをいとなむ職人たちや商人たちも現れました。このようにして人びとがさまざまな職業に分かれながら労働を行い、またお互いに関係しあうことで、社会が発達していきました。そしてその職業によって、社会における身分が決まることもありました。多くの職業に分かれた社会においても、農業の占める割合は非常に大きいままでした。

〈賃金労働の広がり〉

近代以前の農民や職人たちは、労働によって生産した作物や製品の一部を自分自身の物にすることができました。それが大きく変わったのが近代になってからで、工場で機械を使って製品を大量に生産するような工業が発達する中で、それまでの職人にかわって多くの労働者が工場で作品を作るようになりました。工場労働者は工場を経営する企業に雇われて労働に従事しましたが、みずからの労働により生産された製品を自分自身のものとすることはできず、そのかわりに企業から賃金を受け取る存在になったのです。工業がさらに発達していくにつれ、企業の数も多くなり大規模な企業も出てくるようになりました。こうした企業の発展の中で、企業活動に必要な事務の仕事に従事する労働者（いわゆるサラリーマン）も次第に多くなっていきました。また明治時代以降は中央・地方の行政制度が整備されたために、中央省庁や地方の役所で働く公務員も現れました。こうして工場労働者だけでなく、サラリーマンや公務員のような事務労働者も社会の中で重要になっていきました。工業が発達する中でも農業はまだまだ大きな割合を占め続けており、農業従事者も多数を占めていましたが、第2次世界大戦後、特に高度経済成長期になると農業従事者の割合は急速に低下していきました。その反対に、工業労働者や事務労働者の割合が大きくなり、さらには小売業などに従事する労働者も増加しました。こうして現代では、働いている人のほとんどが賃金労働者になっています。この間、賃金は順調に増加していましたが、近年はほとんど増えておらず、長期間の雇用が保障されない非正規雇用の増加や事務労働者の時間外労働も問題とされるようになりました。

〈労働における性別の問題〉

かつて経済の中心にあった農業では、一家総出で農作業を行っていたため、女性も男性と同じように働いていました。近代に入り工業が発達し始めた頃にも、工場労働者として多くの女性が雇われていました。企業にとっては、男性よりも低い賃金で雇い長時間働かせることのできる女性労働者は大変都合のよい存在だったのです。しかしその後、労働者の待遇を改善したり地位を向上させたりする動きが進んだことで女性の労働力は扱いづらいものになっていきました。同時に、「男性が外で働いて稼ぎ、女性が家を守る」という考え方が定着したため、賃金労働は基本的に男性が行うべきものと考えられるようになりました。学業を終えて社会人になる場合も、男性の多くは企業などに就職するのに対して、女性は就職する人が男性ほど多数ではなく、就職しても数年後には結婚を機に退職する機会が多かったのです。企業等の現場でも「女性のすべき仕事、女性向きの仕事」がいつの間にか決められている中で、女性には補助的な役割しか与えられず、男性と対等に働くことができませんでした。こうしたあり方が社会的に問題とされるようになり、1985年に男女雇用機会均等法が制定され、その後2回改正されて現在に至っています。こうして形式的には労働における性別による格差は是正されたはずですが、実際には賃金や行う仕事の種類、雇われ方（正規雇用か非正規雇用か）などの面で格差が解消されたとはいえない状態が続いています。

〈「支払われない労働」〉

ところで、経済が円滑に動き社会が安定するために欠かせないにもかかわらず、それを行った人が賃金を受け取ることのない労働も存在します。こうした労働はしばしば「支払われない労働」などと呼ばれますが、これに費やされる時間や労力は、賃金を受け取る労働と比べても決して小さくはありません。しかも、「支払われない労働」においても性別による偏りが存在しています。具体的には、こうした労働は女性によって担われていることが非常に多いのです。なぜそうなのかという理由はさまざまありますが、こうした状況を改善するためには男性の働き方についても考え直す必要があるでしょう。

〈労働のあり方を変える〉

近年では、「働き方改革」という言葉がよく言われており、実際に働き方を変えていこうという動きも見られます。これは、これまでの日本における労働のあり方が経済や社会に対してよくない影響を与えており、それを変えていくことがよりよい未来のために必要であるとの考えから出てきたものです。これから社会に出た後に充実した生き方をしていくためにも、今日学んだことを機に働くことについてもっと考えてみてはいかがでしょうか。

図1

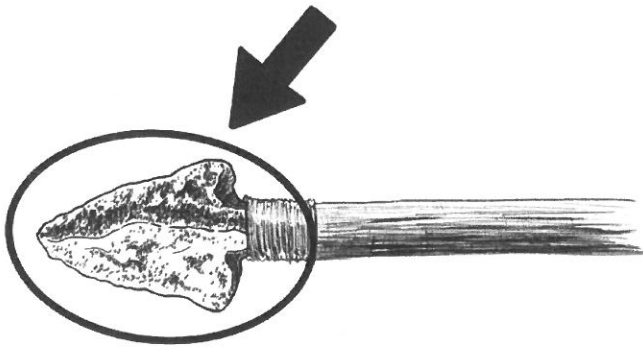
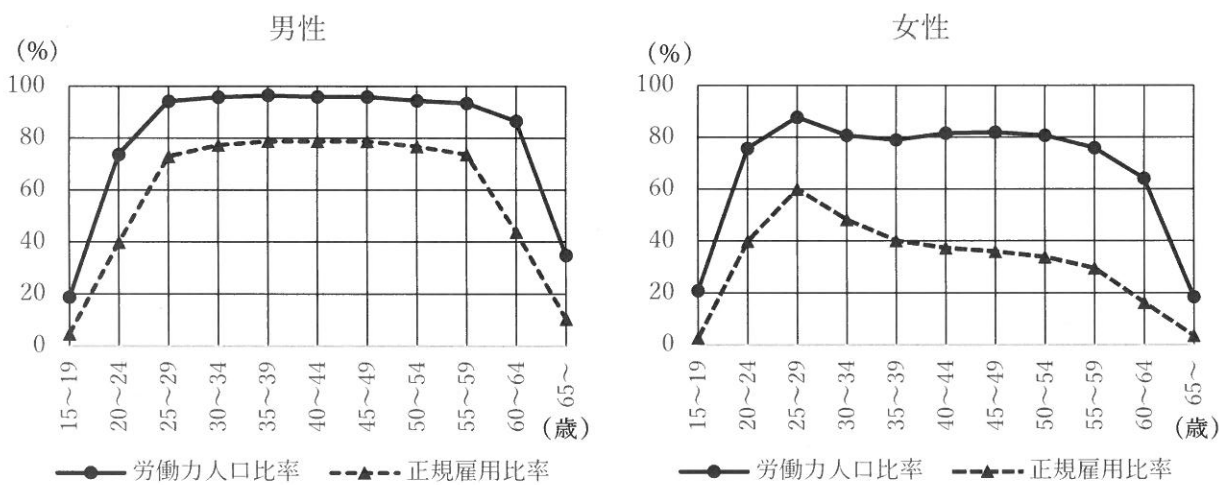


図2



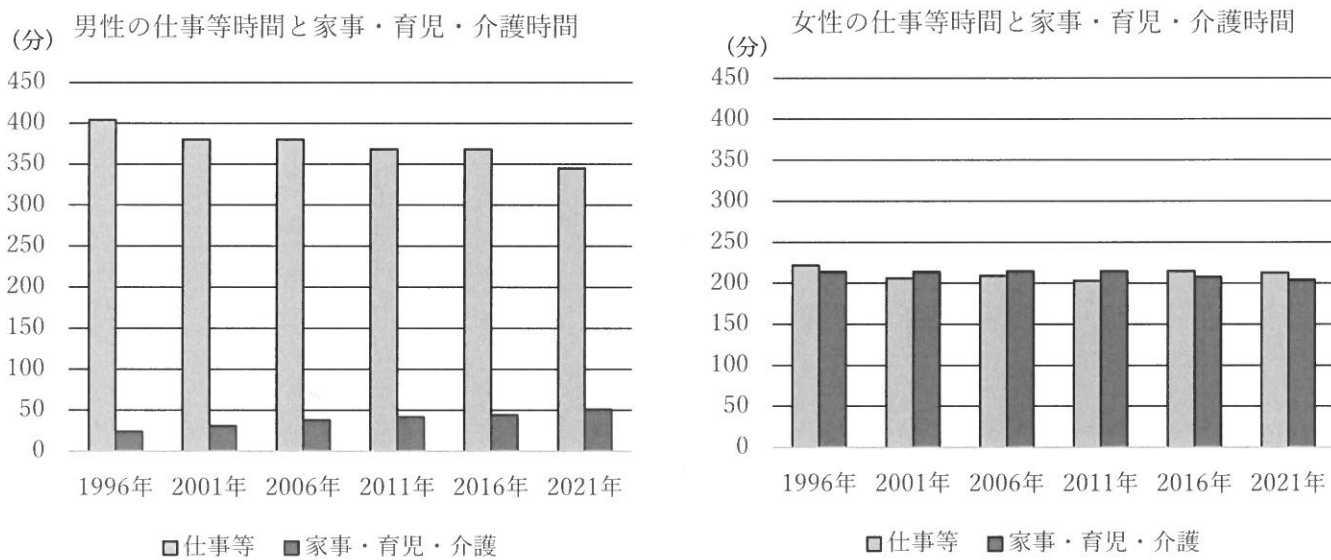
(十字状のもので土器を固定しています。)

図3 年齢ごとの労働力人口比率と正規雇用比率 (2021年、男女別)



(労働力人口比率、正規雇用比率とも、分母はその年齢の全人口。労働力人口に専業主婦・専業主夫は含まれない。)
(総務省「労働力調査」より作成)

図4 仕事(賃金労働)等の時間と家事・育児・介護の時間の平均(1日あたり平均、男女別)



(総務省「社会生活基本調査」より作成)

社会 その3 (4枚のうち)

24	受験番号
中	

問1 図1・2は、縄文時代から使われはじめた道具です。これらを見て、つぎの問い(あ)・(い)に答えなさい。

(あ) 図1は食料となる動物の捕獲で使用されていたものですが、これは何ですか。

(い) 図2は土器です。何のために使用されていましたか。

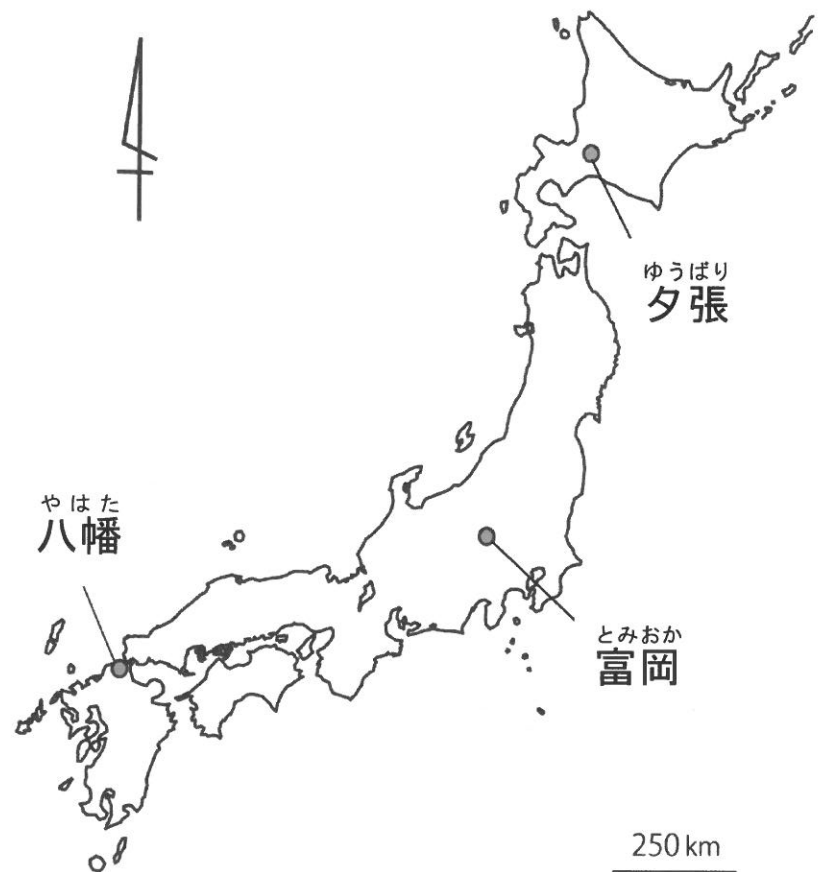
問2 一般的に、農業に従事する江戸時代の人々が属した身分は何ですか。

問3 高度経済成長期を中心に賃金が順調に増加したため、賃金労働者の世帯ではこれまであまり見られなかった物を購入・消費しながら豊かな生活をいとむようになりました。購入・消費されるようになった物を1つあげて、どのように生活が豊かになったのかについて書きなさい。

問4

(あ) 工業が発達し始めた頃に多くの女性労働者が働いていた、代表的な産業は何ですか。

(い) その産業と関係の深い場所を右の地図の中から1つ選び、地名を書きなさい。



社会 その4 (4枚のうち)

24	受験番号
中	

問5 「労働における性別による格差が是正されたはずなのに、実際には格差が解消されたとは言えない」とありますが、図3のグラフを参考に、まだ残っている「性別による格差」について説明しなさい。

問6 「支払われない労働」の代表的なものとしてあげられるのが、家事・育児・介護などです。

(あ) 図4のグラフを見て、仕事等と家事・育児・介護における性別の偏りについてここから分かることを書きなさい。

(い) この偏りを是正するための男性側の取り組みをうながす仕組みとしてどのようなものがありますか。知っていることを1つあげて答えなさい。

問7 労働のあり方を変えていこうという動きの中で、しばしば「ワーク・ライフ・バランス」(労働と生活の適度なつり合い)という言葉が強調されています。この言葉には、これまでの労働のあり方が大きな問題を抱えていることと、個人の生活や家族との関わりを大事にすることがよりよい社会を築くために欠かせない、という考え方が反映されています。ワーク・ライフ・バランスを保つことが、現代社会が抱えるさまざまな課題の改善にどう結びつくのか、それらの課題のうちの1つをあげて説明しなさい。